

## 大リーグで日本人対決というカラ騒ぎ

LL 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

BSを始め日本のテレビ各局は、大リーグでの「日本人対決」ということを殊更に煽り立てる。こういう騒ぎは、これまでも無かったわけではないが、今年14人の日本人選手がメジャーリーガーとして活躍し、そのうち投手が半数の7人ということもあって、特に目を引く現象となっている。

7月20日のレッドソックス対ホワイトソックス戦でも、松坂と井口の対決ということで、実況中継に当たったアナウンサーも、解説者も、そのことばかり口にしていて。中継の合間をぬって見せるリプレイも、それが中心だった。

試合は4対2でレッドソックスの負けとなり、松坂は敗戦投手になったのだが、試合後のインタビューで、井口との対戦を前日から気にしていたことを明かした。

この日、松坂は、勝利投手になってもいいような好投で、六回に交代するまで、相手チームに与えたヒット2、奪三振6、井口に対しても三振、レフトフライ、四球という成績だった。最後の四球は、ストライクとされてもいい球をボールと判定された結果でもあるので、この日の日本人対決は、ひとまず松坂の勝ちであったと言ってもよいであろう。

ところが、実は、松坂を敗戦にまで追い込んだのは、この日本人対決のプレッシャーだったと言えるのである。井口との対決は三度あったが、その一度目と三度目に松坂は突然コントロールを乱し、後続打者に四球を連発して、一回には1点、六回には2点と得点を許してしまった。

井口との対戦に神経をすり減らし、そのあとは一時的に制球力を失ってしまうというパターンの繰り返しだったと言える。日本人対決を喧伝するメディアの騒ぎに染まってしまったのか、松坂自身も前の日から意識過剰になっていたことは明らかだった。

そして、このパターンが、これまでのイチローとの対決などで、松坂に突然襲いかかった不調の原因でもあることは、BSの「ドキュメント・スポーツ大陸」の中で見事に分析されているのだから面白い。

今まで好投していた松坂が突然不調になって、四球を連発したり、打たれたりして大量失点する回は、番組中「魔のイニング」と呼ばれていた。

その魔のイニングが起こるのは、決まって特別な打者と対決した時であり、ヤンキースのアレックス・ロドリゲスとの対決例を除けば、主としてイチローとの日本人対決の直後だということが言われていた。

専門家の分析によると、こういう時の松坂は、力んだり、慎重になりすぎたりして、投球フォームを崩しているという。左足の早過ぎる着地がその証拠で、いわゆる「投げ急ぎ」が、突然襲って

くる不調の原因だというのである。

こういう投球フォームの崩れが、松坂の不調の真の原因と言えるかどうかは別にして、その根底にある、原因の原因とでも言うべきものを考えるならば、アレックス・ロドリゲスのような大リーグを代表する打者との対決、とりわけ日本人打者との対決が、松坂に強い精神的なプレッシャーを与えていることは確かである。

しかし、Aロッドとの対決は分かるにしても、なぜ日本人対決ということがそんなに気になるのであろう。松坂は、国境を超えて、世界レベルでのプレーヤーとの対決に身を投じた人間である。つまり、日本人との対決など捨てて、あるいは卒業して、アメリカでの一流選手たちとの競争に飛び込んできた。今さら、日本人対決などにこだわって、どんな意味があるのだろうか。

松坂は、BSのインタビューに答えて面白いことを言っている。イチローとの対決は今すごく気になっているが、以前日本にいた時にはあまり気にならなかったというのである。

日本ではそれほど意識しなかった対決が、アメリカでは非常に気になる。松坂をそんなふうに追い込んでしまったのは、ひょっとしたら、彼の周辺で騒ぎ立てる日本のメディアではないだろうか。とすれば、松坂に極度の重圧を与え、不調の原因を作り出している真犯人はほかでもない、日本のメディアだということになる。

わざわざアメリカにまで押しかけて、やれ松坂対イチローだ、桑田対松井だなどと、日本人どうしの対戦ばかりを追っかけ回し、それを面白がる心理というのは、いったいどういうものなのであろう。

松坂とイチロー、松坂と井口の対戦を、因縁対決などと報じるメディアもある。イチローは、日本にいた頃は松坂に抑えられていた、果たしてそのリベンジはあるかとか、井口は逆に三割六分も打っていた、メジャーでもその勢いは続くのだろうかなどと、因縁対決のさらなる発展を煽り立てる。

まるで両者が日本にいた頃の勝負の延長を、今度はアメリカで見ようという発想だ。ピストルが支配する西部劇の原野に、日本刀を持った宿敵のサムライを二人送り込んで、切ったり切られたりチャンバラ劇をやらせようという魂胆だ。

イチローが、こういう日本人どうしの対決という発想に批判的だということが判っている。私は以前に「イチローと高津は仲が良いのか悪いのか」という一文を書いたことがあるが、その中でもちょっとこの点について触れておいた。野球に打ち込む者どうしの尊敬感情が重要であって、それは敵味方の区別も、国籍の違いも問題にしない。イチローは実践的にそのことを知っていると言える。

(拙著『イチロー・武蔵・西部劇』ビワコ・エディション版も参照されたい)

松坂がイチローと対戦する時、相手のイチローは大リーグを代表する打者の一人という意味しか持たず、それ以上のものでもなければ、それ以下のものでもない。イチローが日本人だからとか、過去の対戦相手だからといったことは関係ないのである。Aロッドの持つ意味とまったく異ならない。

お互いに敵対意識は持つであろうが、これは、同じプロとして野球に従事する者どうしが、それぞれ敵対するチームの一員として、自分の持っている技術を競い合うということを越えるものでは

ない。ここに、日本人どうしのライバル意識を持ち込むのは、いかにも偏狭すぎるのである。

スポーツ文化のグローバル化ということを考える時、大リーグへのアプローチに日本的な視点を入れすぎると、その全体的な像を見誤らせ、結局は、興味を半減させてしまうことになりかねない。偏狭な民族意識に汚されることのない、健全かつ「清潔」なスポーツ文化の発展を見たいのである。

日本のプロ野球を見る目の延長で大リーグを見ると、日本人の誰々と誰々の対決などといったことが視点となり、アメリカの大リーグを舞台に日本人どうしの試合を見るという、極めて狭い範囲での楽しみ方になってしまう。

この結果、日本人選手の所属しているチーム以外のことはほとんど知らないというのが、テレビ観戦をしている日本人ファンの主たる傾向になっているのではないだろうか。

番組の編成上やむを得ない面もあると思うが、試合の放映が非常に片寄ったものになっており、アメリカンリーグにもナショナルリーグにも、滅多に見ることのできないチームが多数存在する。

それとともに、日本人選手の所属しているチームの間にも格差があり、例えば、松井秀喜の属するヤンキースと松井稼頭央の属するロッキーズの間には、放映の回数といい、情報の数量といい、雲泥の差がある。

かつて日本でも、巨人軍の天下をメディアが作り出したように、今やアメリカでは、カメラを持って、ヤンキースと元巨人軍選手松井を追いかけるのが常態化しており、ヤンキースという球団が、日本の大リーグファンの大多数を支配するようになりつつある。

最近驚かされるのは、日本人アナウンサーにも解説者にもヤンキースファンが多いということで、例えば、ヤンキースとデビルレイズ戦などを見ている、言葉の端々や声の調子で彼らがどちらに与しているかがよく分かるのである。「残念ですね」などという言葉がよく出てくる。片や日本人選手の岩村が属しているチームでありながら、まるでお客さんか、悪く言えばカタキ扱いである。

そう言えば、選手についての情報提供にも濃淡があって、ヤンキースの個々の選手については事細かな説明があり、今ではどの選手も顔馴染みになっているほどであるが、他のチームの選手はほとんど見知らぬ顔ばかりということも珍しくはない。とりわけ、日本人選手のいないチームや、ナショナルリーグのチームに、こういったヨソサマ的傾向が強いのだ。

人気度でヤンキースを追っているのがレッドソックスとマリナーズだが、こういった人気チームのランキングを作り出しているのが、「日本人対決」という低次元のキャッチフレーズであり、この騒ぎの仕掛け人である日本のメディアだと言うことができよう。

日本の文化は、模倣文化だと言われ、翻訳文化だと言われる。グローバル化の中であって、世界的なレベルで物を考えようと、真に独創的で創造的な文化を目指す者がかえって軽視され、あるいは抑圧され、模倣する者や翻訳する者の「日本人対決」だけが重視されるというのが、日本文化の現状である。

スポーツ文化がこの轍を踏んではならないであろう。もう「日本人対決」などどうだっていいのである。日本のプロ野球の延長線上にある小世界ではなく、大リーグ全体の視野に立って見る必要があるのだ。

新しい世界で、新しいライバルを相手に、新しい境地を目指して地道な努力を続けているプレイヤーの、その栄光への軌跡を見せてほしいのである。

[2007/07/28 magmag]